

---

# 箱庭の記憶

東雲咲夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

箱庭の記憶

### 【Nコード】

N1545E

### 【作者名】

東雲咲夜

### 【あらすじ】

あなたも、箱庭の記憶を覗いて見ませんか？きっと箱庭に入りたくなるはずです。素敵な世界ですから。幸福を紡ぎ続ける世界ですから。

## ブローグ

どうも初めまして。私は、案内人と申します。  
不幸な方へと、しあわせを運ぶ為の案内をしています。

私の名前、ですか？

私の名前は、箱庭の案内人です。それ以外にはありません。  
さて、少し質問をさせていただきますね。

あなたは、日頃の生活に満足していますか？

好きな人はいますか？

優しい両親ですか？

裕福な暮らしですか？

信頼できる、ご友人はいますか？

夢は、夢のまま終わっていませんか？

在りのままの自分を表現できていますか？

しあわせですか？

もしも、あなたが今の生活になんらかの不満を持っているのなら  
ば。

箱庭へと入ってみませんか？

箱庭とは、あなただけの世界です。

誰かに愛されたい、誰かを愛したい。

揺らぐことのない、高い地位を手に入れたい。

憎い憎い……相手を殺したい。

あなたが望めば、どんな願いも叶えることができます。  
あなたの世界なのですから。

現実で叶わぬ夢ならば、箱庭の中で叶えればいいのです。

え？ 箱庭なんて嘘臭い……、どうせ夢だろう、と？

箱庭は、夢などではありませんよ？

あなたの今の現実が夢となり、箱庭が現実となるのです。  
傍から見れば、夢に見えるかもしれませんが

その中にいるあなたにとっては、紛れもない現実となるのです。  
ですから、すべてはあなた次第です。

現実と認識しなければ、ただの幻で終わってしまうでしょう。  
夢と認識しなければ、幸福な現実を得られるでしょう。

幸福の形は、人それぞれ違います。

あなたに合った幸福を手に入れることができますのです。

まだ、心配があるようですね。

箱庭は、あなたの望むまま。

あなたが、あなたの現実へ戻りたいと思うのなら。  
箱庭から出て、戻ることができるでしょう。

なにも不安なことなど存在しないのです。

恐れる必要などありはしないのです。

箱庭はあなたの味方であり、敵ではないのですから。

あなたは苦痛を望むのならば、話は別ですが。

どうですか、箱庭へ入りますか？

……私の説明不足なのでしょう……箱庭は、とっても素敵な世界なのに。

ああ、それでは。

箱庭の中へ入るのを躊躇っているのならば、覗いて見てはいかがでしょう？

得体が知れずに怖いのであれば、見てみればいいですよ。

不気味な幽霊も、ススキと分かれれば怖くはないでしょう？

さあ、一歩踏み出してください。

小さな箱庭の記憶を、お見せしましょう。

さあ、終わらない物語を紡ぎましょう  
狭く小さな箱庭の中で。

## プロローグ（後書き）

箱庭…… 始まりました。

連載は、不定期になると思います。そんなに間は空けないように頑張りますが。記憶ですから、色々混じってます。けれども、すべて関連性のない話ではありません。マイペースで進みますので。

## 家族の記憶 1

ジリジリと五月蠅く響く目覚まし時計の音で、是秋は目を覚ました。

気だるい体を起こして、目覚まし時計を止める。

時刻は朝の四時。まだ早朝と呼べる時間帯。

今日は会社で重要な会議があるため、こんな時間に起きることになってしまった。

寝室の中はカーテンが閉めてあるからまだ薄暗い。でも外もきつとまだ薄暗い。

よくわからないことを考えながら、隣のベッドへ視線を向ける。そこでは、妻の美世子がすやすやと気持ちよさそうに眠っていた。まったく……まだ寝てるのかこいつは。

普通は旦那より早く起きて、朝飯くらい用意しておくものじゃないのか。

毎日こんな時間に起きてるわけじゃないんだ。たまたま、早く起きなきゃならないだけで。そんな時だからこそ、いつもより豪華な朝食を用意しておいてほしい。

いつも朝飯は自分で作っているじゃないか。そのくせ、遼平の朝飯だけはしっかりと準備している。旦那より息子の方が大事なのかよ。

もちろん是秋は美世子が夜遅くまで内職していることを知っている。

決して自分の稼ぎが多いほうではないことも自覚している。でも、それはそれなりになんとかやっていけるのだ。まったく美世子は

ああ、駄目だ。駄目だ。

寝不足でいらいらしてきた。

とりあえず、出勤までにはまだ時間はあるから、朝飯を作らないと。

ベッドから降りた是秋は、窓のカーテンを開けようとして、途中で手を止めた。

疲れているんだから、寝かせてやらないとな……。

今はまだ寝ている美世子も、六時には遼平の朝飯の支度で起きるならば、寝かせておいてやったほうがいいか。

是秋は静かに足音を立てないようにして、寝室を後にした。

冷たく冷え切ったりリビングのテーブルで、湯気が立ち昇っている部屋、ずいぶん寒いんだな……

是秋は一人カッププラーメンを啜っていた。

別に冷蔵庫が空だったわけじゃないんだ。

ただ、食材を刻んで、炒めたり、調理するのが面倒だったただけで決して料理ができないわけじゃないんだ。

寝ぼけ眼で料理したら、火事になるかもしれないじゃないか。

包丁で指先、いや、手を切ってしまうかもしれない。

何か問題が起きるのは嫌だからな……安全第一だ。

転ばぬ先の杖っていうしな。

まあ、腹が膨れればいいんだ。

めんどつくさがりな是秋の手には、包帯が巻かれていた。

それにしても……静かだな。

微かに開いた窓からは、小鳥の囀りが聞こえてくる。

ポーターで買った、大きな液晶テレビも今は黒い画面を映している。

美世子はまだ寝ているし、遼平もたぶん爆睡中だろう。  
あいつ寝ぼすけだから。

誰に似たのかは知らないけれど、寝起き悪いしな。

小学校六年生にして寝起きが悪いとは……将来が怖いよ。

色々大変なことはあるけれど……幸せだと思う。

美世子は綺麗だし、遼平はかわいいし。ちょっと反抗期入ってきたけど。

仕事も順調で、平社員から部長にまで昇進できた。面倒くさがりで、小心者の是秋が昇進できたのは、ほぼ奇跡に近い。

そんなに生活は裕福ではない。

けれども、長い休暇のときは小旅行するぐらいの余裕はある。たいしたことじゃないが、会社の健康診断にも引かなかったことはない。

こうというのが、幸せなんだろうなと思う。

仕事になんの不安も……といったら嘘になりそうだが。

目立って大きな障害もなく、家庭関係も順調。

息子もすくすく育っている。

普通に生活する分には問題のない給料。

美世子は是秋のことをよく理解していて。

是秋は美世子のことを深く愛していて。

そんな二人に愛されている息子がいる。

これが、幸せの形なんだろうか。

そろそろ支度を始めないとやばいな……

リビングの隣の和室へ行って、着替えを始める。

丁寧にアイロンのかけられたスーツを手に取り、腕時計をつける。

普通は服を着た後に時計はつけるのだろう。

でも、これがこだわりなんだ。

袖に腕を通すと、自分の中で何かが切り替わるのを感じた。

いつまでも寝ぼけ眼じゃなくて、そろそろ仕事モードにならな  
いとな。

そのまま是秋は通勤鞆を手にして、玄関へと向かう。

腕時計を見ると、一時間経過していた。

靴を履いて、一度だけ振り返る。

誰もいない、けれど清潔な廊下。

あと数時間ごには、美世子が起きて朝飯を作るのだろう。

さらにその後は遼平が学校へ行くのだろう。

この幸せがいつ崩れるのかはわからないけれど。

今を精一杯生きようとなぜか思った。

そして是秋は会社へと向かった。

## 家族の記憶 2

ひやりと冷たいリビングで美世子<sup>みよこ</sup>は朝食を作っていた。  
時刻は六時。もうじき遼平<sup>りょうへい</sup>が起きてくる時間。

ああ、早く作らなくちゃ。

冷蔵庫を開けて、卵とハムと、豆腐と味噌を取り出す。

そして水を張ったお鍋を火をかける。

ついでに、冷蔵庫の隣の棚から、スナック菓子を出しておく。

フライパンに油を引いて、少し温めてからハムを焼く。

そしてその上に卵を落とす。

卵が焼けるまでの間に、お鍋に味噌を溶かしておく。

そして手早く手のひらの上で豆腐を賽<sup>さい</sup>の目に切ると、お鍋に入れる。

お皿にハムエッグを載せて、出来上がり。

はあ。なんだかとても慌しいわ。

本当は五時半に起きようとしていたのに……どうして寝過<sup>こ</sup>ごしちゃったのかしら。

そうよ、思い出したわ。

是秋がいけないのよっ、昨日、明日は一緒に起こしてねって言ったのに。

早すぎるんじゃないか、とかなんとか言ってたけど……

それでもいいって言ったのに。一人でとっとと仕事に行っちゃったじゃないの。

結局自分が起こすの面倒くさいだけじゃないの。

前にもあったような気がするわ。

いっつもいっつも、起こしてくれないんだから。

まあ、仕事をちゃんとしてくれるのは嬉しいんだけどね。

もうちよつと、構ってくれないものかしら。

あ、そろそろ時間。

美世子がお皿をテーブルの上に、味噌汁をよそい始めたとき。リビングのドアを開けて、遼平がのそのそ入ってきた。

「おはよう、りょうちゃん。朝ごはんできてるわよ」

ぱちくり、ぱちくり瞬き繰り返しながら、遼平はぼそつと言った。

「……おはよう」

そしてそのままイスに座り、もくもくと朝食を食べ始めた。慌てて美世子は、コップにウーロン茶を注いでやる。

飲み物ぐらい用意してから食べはじめなさいよね、まったく静かに、小さくハムエッグを千切りながら食べている遼平。少し食べると、味噌汁を啜る。

スナック菓子をパリパリ食べながら美世子は考える。

なんだか遼平って……変よね。

ハムエッグと味噌汁。この組み合わせが一番好みだなんて。

ハムエッグなら、後はトーストとか。

味噌汁なら、焼き魚とご飯とか。

バランスを考えないのかしらね。

和風も洋風もごちゃ混ぜじゃないの。

最近になって、好き嫌いも激しくなってきたし。

お肉をあんまり食べなくて、野菜ばかり食べる。

ちなみに、美世子は野菜炒めが好物。

なんか女の子みたいな食事。

でも、その割には体つきはしっかりしてきてるのよねー。

学校帰りに買い食いでもしてるのかしらね。

丈夫になるなら、なんでもいいんだけど。

「りょうちゃんさ、変なものの好きよねえ」

一瞬、食べる手を止めたが、またもぐもぐ食べ始める遼平。

「何、変なものって。別に普通だよ」

「その組み合わせが変じゃない。和と洋だもの」

「腹に入れば一緒でしょ。食べ合わせも悪いわけじゃないし」  
それに……とぼそつという遼平。

ん？ 何言うんだろう。

「母さんだって、朝から菓子食べてるよね」  
そのことか。

「あのねえ。りょうちゃんの朝ごはん用意したら、お腹空いたの」  
「だったら、自分の分も作ればいいんじゃないの？」

「それは面倒くさいのよ」

「ふうん。体に悪そうだね」

この……口が悪いわね……遼平ったら。  
いったい誰に似たのかしら。

「いいのよ。もう成長期終わってるんだから。りょうちゃんはまだ  
育ち盛りでしょ」

「あれ？ 成長期終わってたんだ。その割には大きいよね」

……それは、太ってるということなのかしら。

なんか、太つてると言われるより、大きいって言われるほうが傷  
つくかもしれないわ。

密かにシヨックを受けている美世子を尻目に、遼平は食事を終え  
た。

「ごちそうさま」

一言いうと、遼平は使った食器をキッチンへと運んでいた。  
こついう所はいいんだけどねえ……。

数分後、手早く着替えたのか、いつのまにか玄関に立っていた。

「ちゃんと教科書入れた？ りょうちゃん」

ブスつとした顔の遼平。背中には黒いランドセル。

全体的に黒っぽい服を着ている。

男の子らしいというか、暗いというか、微妙だわ。

「入れたに決まってるでしょ。寝坊する母さんとは違うんだから」

「こら、言葉遣い悪いでしょう……まったく」

「事実を言ってるだけ。それとさ……」

「何よ？」

「その、りょうちゃんって呼ぶの止めてくれない？ 恥ずかしいんだけど」

「何でよ。別にいいじゃない。遼平なんだし」

「そういう問題じゃない。いつまでも乳飲み子じゃないんだから」  
「なんだ、その乳飲み子って。子供じゃないって言いたいのかな。やっぱり遼平はちよつと変。いや、結構変かもしれない。」

でも、ちよつとむかついたから反撃してみようかしら。

「りょうちゃん、りょうちゃん、りょうちゃん、りょうちゃん、りょうちゃん……」

「ちよ。行ってくるから」

ちよつと、今舌打ちしたんだけど、遼平。

そのまま遼平は行ってしまった。

……なんというか、性格が捻くれているのかしら。

それとも寝起きで機嫌が悪いのかしら。

たぶん、是秋に似たのね。ええ、きつとそうよ。

一人納得しながら美世子は、食べかけのスナック菓子を食べる為、リビングへと戻った。

でも、と美世子は考える。お菓子を食べながら。

なんだかんだいっても、幸福なのよね。結局のところ。

かなーり捻くれて、反抗期に突入しつつはあるけど、遼平もちゃんと育ってるし。

たまに旅行ができるくらいには、余裕あるし。

欲をいえばきりが無いけど。

是秋は、けっこうカッコいいし。ちゃんと大事にしてくれるし。自分も、遼平も。

まあ、こんな感じかしら？

とりあえず、不幸ではないわよね。ええ。きっと。

あ、なくなっちゃった。

ゴミ箱へと空袋を捨てるついでに、冷蔵庫をあけてみる美世子。まだいまいちなのよね……何か食べるものないかしら。

そのとき、美世子の視界にラップに包まれたお皿が眼にはいった。

昨日はあまったものはないはずよね……何かしら？

お皿を出して見る。

その中に入っていたのは、赤や黄色、緑色……野菜炒めだった。

昨日、野菜炒めは作っていないわ。

それなのに、ここにあるということとは……

たまにはいいことしてくれるじゃないの。

ふわりと、美世子は微笑んだ。

### 家族の記憶3

空を見上げると、綺麗な青色だった。

一人、遼平は通学路を歩いていて。

まったく……さっきのはうざったかったなあ。

嫌だつて言ってるのに、呼ぶなんて。

思わず舌打ちしてしまったよ。ちょっとは効果あったかな？

本来は通学班で登校するのだが、遼平はいつも一人で登校する。

なんだか今日は人が多いなあ……

周りを見ると、多くの通学班がいる。

いつもと同じような時間帯で家を出ただけだな……

もしかしたら、母さんとぶつぶつ言ってる間に時間が経っていたのかも。

まったく、何がりようちゃんだよ。女みたいじゃないか。

女じゃなくて、男なのに。

でも、別に母さんのことが嫌いなわけじゃない。

もちろん、父さんも。

どちらかといえば、母さんの方が気になるんだけどね。

産んでくれたからなのかな？

母さん一人で産んだんじゃないのはわかってるけどね。

ゆっくり歩きながら遼平は思う。

毎日が、あつたかくてふわふわしているんだ。

これが、しあわせなのかな？

よくわからないけれど。

父さんも、母さんもちゃんという。

別に虐待とかされてないし、何も悪いことはない。

学校も、まあまあ楽しいかな。

いじめられてないし、そこそこ……勉強も楽しいかな。

たまに頭がこんがらがってしまっけど。

世の中には、不幸な人がたくさんいるってこの間先生が言ってた。

例えば、食べるものがなくて、常にお腹が空いていたり。

例えば、両親がいなかったり。死んでしまったり。

例えば、愛情？ を注いでもらえなかったり。

まだよく愛情っていうものはわからないんだけど。

とりあえず、嫌われていないって事だけはわかるかな。

ああいう風に…… からかってくるのも、愛情…… なんだろうか。  
ちよっと迷惑かもしれないけどね。

時々、変な感じがするんだ。

とっても嬉しく思うんだ。

なぜかわからないけれど、とっても幸せだと感じるんだ。

泣きそうになってしまいうくらい、心地よくなるんだ。

デジャヴっていうのかな？

この生活を、待ち望んでいた…… みたいなの。

心の奥底で、ずっとずっと待っていた気がするんだ。

この平凡な生活を。

本当に何故だかわからないんだ。

でも、本当に嬉しい。

望んでいたことが叶ったから、しあわせなんだなって思えるんだ  
ろくなつて。

変だよな？ 不思議だよな？

待っていた、なんて。

だって、初めて産まれてきたんだよ？

その前は、知らないはずなんだ。

不思議だよねえ、本当に。

前にテレビで見たんだけど……。

子供は、親を選んで生まれてくるって。

あれ、本当だったらすごいよね。

だって、選んだ親がいい人でも悪い人でも、その子供が選んだんでしょう？

すごいよね。

歩きながら考え事をしていた所為か、いつのまにか学校へと遼平はついていた。

ああ、クラスに行かなきゃ。

下駄箱で靴を脱いでいると、友達が何人かこっちに向かって走ってくる。

「りょーへい君、おはよー！」

大きな声で遼平の名前を叫びながら。

遼平も、呼んだ友達の方へと走って行く。

ああ、しあわせてこういう事なんだなあ。

### 家族の記憶3（後書き）

家族の記憶はこれにて終了です。  
では、次の記憶へどうぞ？

## 恋人達の記憶1

ザワザワと騒がしい、お昼休みの教室。皆、思い思いの場所で昼食をとってる。

教卓に座って食べてたり。

床に直接座って食べてたり。

机の上に乗って食べてたり。

中には、ベランダで食べてる人もいる。

馬鹿な奴は、机の上に座って、そのまま後ろにひっくり返ったりしている。

何やってんだかね……アホじゃないんだから。

お菓子食べたり、お弁当食べたり。

ジュース飲んだり、取っ組み合いしたり。

学生にとって、お昼休みはとても楽しい時間。

なのに。

「はあ……ああ、もうどうしよう！」

沙耶香は、教室で頭を抱えていた。

楽しくない、全然ちーっとも楽しくないわっ！

髪を掻き毟りながら小さく叫ぶも、教室の喧騒に吸い込まれてしまった。

ああ、どうしよう。どうしよう。

どうしたらいいのかな。

やっぱり止めたほうがいいのかな。

でも、駄目でも伝えたいし。

……駄目だったらへこむかもしれない。

あーでもない、こーでもないとかく沙耶香の頭に空き缶が飛んできた。

「わっ！？ ちょっと、誰よ、今投げたのッ」

「ごめん。当たっちゃった」

どっかの男子め……後で倍返しにしてやる……。

「てーかさ、何でそんなにカリカリしてんのぉ？」

「あんたには関係ないでしょ！ 口挟まないでよね」

「あ、そっかあ。例の先輩のことか」

沙耶香は思いっきり、先ほど飛んできた空き缶を投げ返してやった。

カコンツといい音が続いて聞こえた。二度三度と。

よっしゃ……クリティカルヒット。

あんなバカ男子から、先輩のことなんか聞きたくないわ。

沙耶香は今、恋愛のことで悩んでいるのだ。

好きな先輩がいるんだけど……ああどうしよう。

告白しようか、やめようか。

一応、下調べの段階では、今現在付き合っている人はいないらしい。

なら、チャンスはあるのよ……一応。

でも、でもでも！ 大きな問題が一つ。

先輩……すっごく美形なのよね。

髪は女の子みたいにサラサラで、顔はほっそりしてる。

鼻もスツと通ってて、瞳がすっごく綺麗なの。

勉強もよくできて、よく学年一位をとってるって話し。

いい学校に進学するんだろうなあ。

もちろん、スポーツ万能。

なんだっけ、確か一番バスケが得意で、バスケット部に所属してる。

男って感じで、がっしりした体つき。

でも、筋肉バカじゃない感じ。

頭いいのも、鼻にかけないし、誰にでも分け隔てなく優しい。  
そんな素敵な、隼人先輩。

うつとりとしていた沙耶香の顔が、急に曇る。  
それなのに……。

私は、特別醜くもなければ、特別美しくもない。  
スラと脚線美でもないし、ぼつちやリ癒し系でもない。  
そんな普通な容姿の自分が、時々恨めしくなるわ。

勉強も、そこそこできる。

運動も、まあ、運動音痴ではないかなってくらい。

平凡……本当に平凡すぎる……うう。

せめて、何か一つ突出してるものがあれば……

駄目だ……どれも平均値だわ。

告白しようか……どうしようか。

もはや告白前から、結果が見えているようなものなんだけど……  
宝くじが当たるくらいの確立で、もしかして　　があるかもしれ  
ない。

先輩、優しいし。

そう思うと……諦め切れないのよね。

当たって砕けるな気分になっちゃうのよ……うわあ。

本当に突撃して、玉砕したら……すぐく痩せそう。

うーっ……誰かに相談しようかな。

相談できるような親しい友達っていたっけ。

沙耶香の頭には、別の悩みが首をもたげてきた。

さっきのバカでアホな男子は役に立たないし……むしろ先輩に余  
計な被害が。

女子も、なんだかんだで、キヤーキヤー言ってるだけだし。

変な噂広まりそうだし……

こーなったら、アイツしかいないわね。

男子の中で、唯一といってもいいほどに、親しい友人。というか親友。

和也なら、きっとまじめに相談に乗ってくれるよね。  
よしっ、放課後は和也に相談に行こう。

ん……？ 何か教室が騒がしい。  
ロッカーを開け閉めする音や、ゴミ箱を蹴っ飛ばす音が聞こえ始めた。

時計を見ると、もうじき午後の授業時間だった。  
さーあと二時間、頑張るか！

沙耶香は、張り切って机に突っ伏した。

## 恋人達の記憶2

「も〜！ どうすればいいと思う！？ 和也っ」

「いきなり教室に来てさ、叫ばないで欲しいな……」

まだまばらに人が残る放課後の教室。

沙耶香は和也の所へ来ていた。

もちろん、例の相談をするためだ。

「あー……先輩のことだっけ？」

「そう！ 先輩のことに決まってるわ」

少しだけ苦い顔をしながら、喋る和也。

「で、先輩の何？」

「だあ〜から。告白するかどうかよ！」

「それを僕に聞かれてもなあ」

「そんなこと言わないでよ〜頼りになるの、和也くらいなんだから」

「本当に？」

「そうよ。だから来たんじゃないの」

ん〜？ なんで和也うれしそうなんだろう。

私になにか喜ばせるようなこと言ったかな？

「それで、君はどうしたいの？」

「え？ もちろん、告白したいわよっ」

「じゃあ告白すればいいじゃないか」

「それができないから、相談に来てるんじゃないの」

何で？ と不思議そうに首を傾げる和也。

「君は好きなんでしょう、その先輩の事？ だったら、迷う必要はないじゃないか」

「好きだけどっ……でも〜」

そんなに簡単にできたら、こんなに悩んでないよっ。

「僕だつたら、好きならちゃんと告白するよ？」

こんな風に、と和也は沙耶香の顔を見る。

「沙耶香、好きだから、付き合って？」

……

……

「へっ!？」

ちょ……和也？

「へ、変な声出ちゃったじゃないの。もう、驚かせないでよね」

「ドッキリじゃないよ？ 本当だよ？」

「だから、私は先輩が好きなのよっ」

「うん。もちろん知ってるさ。あれだけ相談されたんだから」

「じゃあ何で今、そんなこというのよっ」

なっ……なんでそんなにジーっと顔見るのよ！ 恥ずかしいじゃないの……

「だから、僕はちゃんと伝えるんだよ」

「伝えて……駄目だったらどうするのよ」

駄目だったら？ と答える和也。

「駄目でも、いいんだよ。好きっていうことは伝えられたんだから」

あ……そっか。

「ありがとっ！ 和也！」

「え？」

沙耶香は、和也の手を握り締めて、ぶんぶんと勢いよく振り回す。

「だって、私に大事なことを教えてくれたじゃない！ 好きって伝えることが重要だって」

「あー……うん。まあ、わかってくれたならいいかな……」

なんでちょっとがっかりしてるんだろう、和也。変なの。

「まあ、告白するなら、したほうがいいよ？ 来年には卒業しちゃうしね」

「ああっ！ そうよね、そうよ！ 先輩いなくなっちゃうなんて……うう」

「君は……感情の起伏が激しいねえ」

「なによっ、怒りっぽいつてこと！？」

「カルシウム、足りてるかい？ ちゃんと牛乳飲んでさ」

「足りてるわよっ、まだ身長伸びてるんだから」

それにつ、と叫ぶ沙耶香。

「和也がおじいちゃんみたいに落ち着いてるのがいけないのよ」

「君は口も悪いんだね……」

……急に静かになっちゃった。

教室を見渡してみると、先ほどまで何人か残っていた生徒もいない。

そろそろ、帰ろうかな。

「和也、今日はありがとね？ 色々教えてくれて！」

「うん。まあ、よかったね」

「何よ、その微妙な返事」

「いや、はぐらかされたからね。なんでもないけど」

「？ 変なことばかりいうわね。じゃ、帰るね？」

「わかった。気をつけてね」

「もちろん、襲われたら大変だからね！」

「誰も君の事は、襲わないと思うよ……？」

「なんでよッ」

「空手ならってるじゃない」

「関係ないでしょうー！」

叫びながら沙耶香は教室を出て行った。

一人残された和也は呟く。

「僕は伝えても、それだけじゃ終わらないよ。諦めないからね？」

### 恋人達の記憶3

次の日、沙耶香は北門の前で、一人佇んでいた。辺りはぼんやりと薄暗くなりはじめ。

ああ……ちゃんと見てもらえたかなあ。

沙耶香は放課後、部活が始まる前に、先輩の下駄箱に手紙を忍ばせておいたのだ。

部活が終わったあと、北門へ来てください

もちろん、誰にも見られないようにこっそりと。

まるでストーカーみたいだなって、一瞬考えてしまった。普段先輩は、南門の方から帰ってしまうのよね……だから見られてなかったら……と考えると、すごく不安になる。もう帰ってしまったんじゃないかって。

或いは、イタズラだと思われて、捨てられてしまったんじゃないかって。

沙耶香はキョロキョロと辺りを見回す。

恐らく運動部であろう人たちが、外周走をしていたり。

部活を終えた生徒がちらほら帰り始めている。

私の待ち人は……まだ来ない。

先輩が、いくつも部活を掛け持ちしているのは知ってる。

毎日、忙しいってことも。

きつと、部活が忙しくて……まだ来ていないだけだね。先輩は優しいから、きつと来てくれるよ。

本当に、そうなんだろうか。

不安が、沙耶香の中でどんどん膨らんでいく。

鎌首をもたげる、蛇のように。

もしも、もしもの話しだけ。他の人に見られていたら？  
それは私が一番恐れていること。

あの時、私は周囲をちゃんと確認したんだから。

見た限りでは、誰もいなかったもの。

というか、見られてないと信じたい。

でも、大丈夫よ、きっと。誰も私のこと見ていないもの。  
どうか、先輩が手紙を破り捨てていないと信じたいなあ。

私、字は汚いし。

先輩とも、数回しか話したことないし。

ああ……変なこと考えるのやめよう。

どんどんみじめになってきちゃう。

駄目でも、OKでも、伝えられればいいのよ。

まずは、それが一番大事なことよね。

よし、深呼吸して、心を落ち着かせよう……

大きく息を吸って　吐いて。

もう一回。

吸って、息を吐いてから、体の力を抜いてリラックスする。

ちよつと体も動かそうかな……

緊張しすぎて、固まっちゃったよ。

沙耶香が体をモゾモゾ動かしていた時

「俺を呼び出したのって、君？」

「はいッ!？」

いきなり掛けられた声に驚いて振り向けば、そこには隼人先輩がいた。

……いや、いたじゃなくて、私が呼んだのよ。

「はい、そうですっ」

「そうか、よかった。人違いかと思った」

「ど、どうしてですか？」

「いや、今君ラジオ体操みたいなのしてたから」

「ラ、ラジオ体操…… ちょっと体を動かしてたつもりなんだけど。周囲にはそう見えてたのか。」

「しかも先輩にまで見られてるじゃない…… うう、恥ずかしい。」

「今のは…… 見なかったことにしてください、お願いします」

「ん？ いや別にいいけどね」

「優しい先輩でよかったな……」

「それで、と隼人先輩は話す。」

「えっと、俺に大事な話があるんだよね？」

「はいッ」

「話してもらえるかな？」

「うああ、とうとうこの時が…… 来てしまったわ。」

「いざとなると、口にしづらい…… うう。」

「先輩、そんなにこやかな顔でこっち見ないください。」

「緊張しすぎで、金魚のように口がぱくぱくしてしまう。」

「先輩は、やっぱり私を見てる。」

「きっと話すのを待っていてくれるんだろうな。」

「ちゃんと、伝えなきゃ。」

「先輩、私と付き合ってください！！」

「私は、しっかりと声にだしていった。」

「先輩の顔は…… 怖くて見られない。拒絶されたら、どうしようって。」

「下を向いたまま、先輩の答えを待つ。」

「本当は、数分しか経ってないのだろうけど、何時間にも感じられる。」

しばらくして、私の耳に先輩の声が届いた。

『ごめんね、君とは付き合えない。他に好きな人がいるんだ』

私は、怖くて顔を上げられない。

耳に聞こえた先輩の声は、ちよつとぼんやりしているけども、私を、拒絶する答え。

先ほどまでドキドキして熱かった体が、急激に冷めていく。

そのくせ、鼓動だけはどくどくと五月蠅い。

ああ、やつぱり駄目だったんだ。

私なんかじゃ、先輩とは釣り合わないんだ。

だって、先輩他に好きな人がいるって。

きつとかつこいい先輩が好きな人は、とっても素敵な人なんだろうな。

私なんか、比べ物にならないくらい。

月とすっぽんみたいなものだったんだろうな。

冷たくなった体が、がくがくと震えだす。

胸に溢れるのは、失望感。

何故だか、無理だって最初からわかっていたような気がする。

胸が、苦しくて。

震えて崩れ落ちそうになる足を叱咤しながら、沙耶香はきびすを返し、走り出す。

早く……はやく、一人にならなくちゃ。

「あ……、ちよつと!？」

後ろで、先輩の呼ぶ声がした。

慌てたような感じの声。

門を抜けて、道路にでようとした時、私の腕を誰かが掴んだ。

掴んだ腕の主を見ると、隼先輩だった。

振りほどこうとしたけれども、途中でやめてしまった。

どう考えても、先輩の方が力が強いよね……

「君、どうしていきなり走り出したの？」

さきほどもでと同じ、優しい声で問いかけられる。

「どうしてって、先輩、好きな人がいるんでしょう？」

「え？」

「さつき、私とは付き合えないって言いましたよね……？」

先輩は、なぜか驚いた顔をしている。

……何か、おかしい？

「ちよっと待ってくれるかな」

「はい」

「俺はね、さつき、イエスと答えたんだよ？」

え？

でも、さつき私の耳は、確かに先輩の声を聞いた。  
拒絶の声を。

でも、今先輩は、いいつて、言ってる。

あれ？ 何かがおかしい。やっぱり変。

「それ、本当ですか？」

「ああ。俺が嘘ついてどうするんだい」

「でも、確かにさつき私は……」

「それは、聞き間違いとかなじゃないのかい？」

「でも……」

「俺は、確かにいいよって言ったんだ」

もしも、私の聞き間違いならば。

……………これほど恥ずかしいことはないじゃないっ！？

「あ、あの、先輩っ、さつきは逃げてすいませんでしたッ」

「聞き間違えて、逃げてたんだね」

「うっ」

「まあ、わかってもらえてよかったけど」

ホントにすいませんでした……先輩。

でも、まだちよっと心配。

「それで、先輩……本当にいいんですか？」

「君と付き合うこと？」

「はい。私なんて、綺麗じゃないですし、かわいくもないです」

「なんで私、自分の欠点しゃべってるんだろ。逆効果じゃない。」

「いいんだよ。嫌いだったら、OKしないよ」

「好きなんですか？」

「とりあえず、嫌いではないよ。付き合ってもいいって思ってるんだから」

「そうなんですか……」

「ゆっくり、お互いのこと知ればいいと思うんだけどな、俺は」

「そうですよね……ありがとうございます」

「じゃあ、とりあえず帰ろうか？ 帰り道同じ方向だよな？」

「！？ なんて知ってるんですか……」

「帰り道、よく見かけたからね」

「み、見られてたのか……先輩に！？」

「あわわ……どうしよう。」

「行くか……沙耶香？ でいいんだよ、名前」

「あ、はいっ」

歩き出した先輩の後に私はついていく。

和也、ありがとうね。和也が言ってくれなかったら、告白なんてしなかった。

そのまま、きつと諦めていたわ。

私、今とっても幸せ。

付き合ってもらえるんだもの。

でも……なんだか妙なしこりが残っているの。

何か、大切な事を忘れているような。

私の……気のせいかしら？

## 恋人達の記憶 another

和也は、駅前の商店街で、彼女を待っていた。

もうとづくに待ち合わせの時間は過ぎてるんだけどな……

きよるきよる視線を彷徨わせるも、彼女の姿は見えない。

また 遅刻かな？

彼女は、いつもいつも遅刻をする。

約束の時間を守ったことなど……一度くらいはあったかもしれない。

腕を組んで、ぼうつと彼女を待つ。

そのとき、胸ポケットで携帯が振動した。

見てみると、一通のメールが来ていた。

『ごめん、遅れちゃった！ 今から支度するから、もうちょい遅れるね』

……遅れちゃったじゃなくて、寝坊したんじゃないかなあ。

一時に約束したのに、今三時だよ。

つまり、午前中いっぱい寝ていたってことでいいんだろうか。

寝すぎだよ……沙耶香。

これじゃ、デートはまだ始まりそうにないね。

和也は、最近のことを思い出してみることにした。

あれは……沙耶香に恋愛の相談をされたときだったかな。

好きな先輩がいて、どうしようって。

どうしようもなにも、告白すればいいだけじゃないかと思ったな。それが難しいらしいから、僕がお手本を見せたのに。

役に立ったのか、立たないのかわからなくなってしまった。

それに、僕は冗談でも何でもなくて、本音だったんだけど。

ほんとに、彼女の事が好きだったんだ、昔から。

ずつと、隠していたんだけどね。

ここぞとばかり、言ったんだけど……はぐらかされちゃったよ。彼女ったら、ありがととか何とか言って、そのまま行ってしまったよ。

置いていかれた僕は、途方に暮れたよ。

放課後の教室で、一人……ね。

でも、諦めるなんて、ぜんぜん考えてなかったよ。

僕は、欲しいものは手に入れる主義なんだ。

もちろん、相手の意見も尊重はするけれどね。

それから数日後、放課後の教室にで一人考え事をしていたんだ。どうしようかなくて、ね。

そしたら、彼女が泣きながら教室に飛び込んできたんだ。

うん、びっくりしたよ。まさか泣いてるなんて思わなくて。

僕のこと見るなり、逃げ出そうとしたんだけどね、腕を掴んで引きとめた。

それで、色々話を聞いたんだ。

彼女は、先輩に振られたんだって。

他に好きな人がいるから、付き合えないってはっきりいわれたって。

僕は……泣いている彼女を慰めるしかできなかった。だってね。

僕は、先輩に好きな人がいるってこと、知ってたんだ。

彼女から、相談されたときには、もう知ってた。

僕は振られるのは知ってたのに、彼女を止めなかったんだ。止めるどころか、躊躇っている背中を後押ししたんだ。

行つてらっしゃい、ってね。

ひどいよね。ずるいよね。

彼女が傷つくだけだって分かってたのに。

振られてしまえば……僕のほうを見してくれるかもしれないって思ったんだ。

彼女が傷ついていても、悲しんでいても、欲しいって思ったんだ。

だから、泣き止んで、落ち着いた彼女に聞いたんだ。

『ねえ、僕と付き合ってくれるかい？』

彼女はね、ゆっくりとだけど、確かに頷いたんだ。

僕は、嬉しいけれど、悲しかったよ。

それから、僕達は付き合いだしたんだ。  
でもね、とても虚しかったよ。

僕は彼女を見ているのに、彼女が僕を見ていないんだもの。  
笑ったりはしてくれるけど、昔みたいな微笑じゃないんだ。  
僕が知らない、彼女なんだ。

心が、どこかにいつてしまった。

冷たくはないけど、暖かくもなかった。

彼女は、前は陽だまりみたいだったのに。

ずっとずっと、昔から、愛してた。

ばれないように、ひたすら隠して。

想いを告げて、手に入れられたと思ったのに。

僕は、僕が知っている彼女が欲しかったんだ。

抜け殻の彼女なんて、いららないのに。

でも、それでも、彼女といたいんだ。

たとえ僕を見ていなくても。

僕を愛してくれなくても。

僕は彼女を愛している。

ただ、それだけでよかったんだ。

数カ月後、彼女が学校に来なくなった。

病気で体調を崩しているのか、なんなのかわからない。

でも、彼女は学校に来なかった。

携帯に電話しても、留守番電話の機械音が出るだけ。

彼女の声が無性に聞きたくなっていたっけ。

それに、後悔もたくさんした。

本当は、あのとときに、教えてあげたほうが良かったんじゃないかって。

あらかじめ、駄目だと分かっているなら、傷つかないかもって。傷ついても、浅くて済むかもしれないと。

でも、教えていたら、僕は彼女と付き合えなかった。

そう考えると、今のままでいいんだって思えてしまう。どこまで考えても、結局はそこに戻ってしまう。

彼女の気持ちなんて、ぜんぜん大事にしていけないじゃないか。

僕が満足しているだけで。

ああ　僕はなんて醜いんだろう。

彼女がいなくなってから、さらに数カ月後。

僕のところに、彼女からメールが来たんだ。

今までごめんねって。

それから、彼女は学校へも来るようになった。

どうして来なかったの？　と聞いても彼女は答えてくれなかった。

不思議なことに、彼女は優しくなっていたんだ。

今までの彼女が冷たいというわけじゃないんだけどね。

昔みたいに、笑ってくれたんだ。

先輩のことが、たぶん吹っ切れたんだろうと思った。

スイッチの切り替えは、早いんだよ、彼女。

僕は、今までの不安なんか吹き飛んで、とても嬉しかった。

選択は、間違っていなかったんだなって。

僕達は、本当に恋人になった。

「お待たせ」和也っ

愛しい声に、意識が現実へと戻ってくる。

遠くの方から、沙耶香が走ってきた。

「ごめんごめん！ 遅れちゃった」

「遅れたってね……今何時だと思ってるの？」

「いいじゃない。待っててくれたし」

「それは、君からメールが来たから」

さすがに何の連絡もないなら、こんなに待てないよ。

「あー、ごめんってばあ」

微笑みながら、和也の腕を掴む沙耶香。

うん、やっぱり沙耶香は、明るいほうが似合ってる。

「それじゃ、行こうか？ 帰りは夜になるかもしれないけど」

「もちろん。行くに決まってるよ」

「そう。じゃ、ほら」

僕は、彼女の手のひらを握った。

彼女も、僕の手のひらを握り返してくれた。

「行こうか……沙耶香？」

「うん、和也っ」

僕達は、予定していた場所へと向かった。

愛しい彼女が傍にいて。

僕は彼女を愛していて。

彼女も僕を愛してくれている。

相思相愛のすばらしさ。

ああ この幸せを望んでいたんだ。

## 夢追い人の記憶（前書き）

お久しぶりです。それではどうぞ。

## 夢追い人の記憶

私は昔から人に尽くすことが好きだった。

泣いている子供をあやしたり、重い荷物をもった老人を手伝ってあげたり。

学校の課題などを忘れてわめいているクラスメイトには、なんと課題を写させてあげただろうか。

私のようなちっぽけな個人でもできることから、それなりに規模の大きいボランティア団体に所属していたこともあった。

一般的な人間の人生の半分も生きていないけれど、たくさん、たくさん、活動を行ってきた。

ひとつ誰かのためになることをするたびに、満足を繰り返してきた。

そのせいだろうか。

私は、次第に物足りなさを感じるようになった。

もっと、もっと誰かのためになることを。貪欲に、渴望は深さを増していった。

慈善団体、公的なイベント……インターネット、図書館、人の噂。私は何かすべはないかと、探し続けた。

どれくらい探しただろうか。インターネット上の掲示板で興味深い噂を見つけた。自分の思い描いた世界にいける、というものだった。

それは手段なのか、そういった場所があるのか　噂はごちゃごちゃとしていた。

ある人は、それは箱庭だという。ある人は、それはモルモットだという。ある人は、それは理想郷だという。

ひたすら調べ続けた。書き込み相手にメールを送ってみたり、街中で聞き込みを試みたり。

もちろん、その間もできうる限りの人助けは怠らなかった。大き

なことを探しているとはいえ、小さなことをないがしろにしてはいけない。

その日も特別は実りがないまま、町をさまよっていた。すると、私は一人の女性に声を掛けられた。

まったく見知らぬ女性で、見た感じは小奇麗な印象を受けた。細い腕にはたくさんのピアを抱えていた。おそらくは、セールス勧誘だろう。

普段から、宗教、物品販売、勧誘……ひと通りの話は聞くように心がけていた。誘う側も仕事だろう。聞く側は自由だ。

話を聞いてあげること、一時的にでも可能性をあげられるのなら。もっとも、最後にはきっぱりと断るようにはしている。

だから、結局はいつときの淡い期待にしかないのだけれど。それでも私はいいと思っている。

にこやかに微笑む女性の口から、どんな誘い文句が飛び出すのかと待っていると、『箱庭に入ってみませんか？』

私の心臓が口から飛び出してしまうかと思った。

頭がまつしろになってから、すさまじい魅力を感じた。

たとえば、目の前に積み上げられた金銀財宝。たとえば、豊満な裸体をさらけだした妖艶な美女。

それらはすべて、私に向かってさあどうぞと手招いている

本当かどうかなんてわからない。ただ、目の前の彼女がそういっただけだ。

それでも、私には魅力的だった。

私は、もっと知りたかった。

私と彼女は手近な喫茶店に入り、私は彼女を質問攻めにした。

彼女は私にこと細かに説明をしてくれた。

箱庭とは、しあわせな場所なのだと。何でも望みが叶う、夢のような場所。

人それぞれ、しあわせの形は違う。

思うが俤、望むがままかたちづくられる自分だけの世界。たとえば、私はそんなことは願わないけれど、仮に。

誰かを殺したいと願えば、たやすく叶えられるという。

殺したいわけではない。生かしたいわけではない。

ただ、満たしたいだけ。

ただ、満たされたいだけ。

それが誰かの願いならば

嘘のような、幻のような箱庭。

楽園のような、地獄のような檻。それは私が無意味に考えたこと。そこに行くのに、特別なものは何も必要がないという。

本人の同意さえあれば、ほかには何も。

資格なども、関係がないという。

細腕の彼女いわく。

こうして話を聞いたこと自体が、一種の資格のようなものだといえるらしい。

「あなたは、入ったことがあるのですか？」

ひとしきり話を聞いてから。

私は彼女にそう尋ねた。名前も知らない女性。

私にとって、それは意味がないものだけれど。

この私の人生。その中では誰もが登場人物にすぎない。

彼女はさしずめ……案内人とか、そんなものだろう。

喫茶店の人々もしかり。どれも意味はない。

満たして相手も同じ。

私にはそのためにいるようにしか思えない。

変だ、歪んでいるとは思うけれども。

それが、この私というものなのだ。

私にとって意味のある行動、言葉は限られている。

「わたしが、嘘をついていると思って？」

真偽なんて。それも、どうでもいい。

箱庭へと私は、向かうのだから。

自分の目で確認すればいいだけのこと。  
どちらでも、私の望むことは変わらない。

私は、私の世界で、人に施しを続けるだけ。  
足りない、何度やっても足りない。私は飢えている。  
ちっぽけなものでは、もう嵩が足りない。

いや大小の問題ではない、疼きの問題だろう。

空になってはいけない、常に満たし続けなければ。  
渴いてはいけない。欲望が導くままに。

溢れるくらいでいい。何度でも飲み干そう。

困って、解決して。悩んで、救ってあげて。

繰り返して、繰り返して、終わらなければいい。

飽くことなどないのだから。

微笑みは簡単なのだから。

ありがとうは尽きないのだから。

「いいえ、めっそうもない」

「それで、どうなさいますか？」

細腕の、彼女の問いかけ。私は、たった一言。

「喜んで」

彼女の顔が、作り物みたいに微笑んだ。

ああ、彼女の望みも今ひとつ、叶ったのだろうか。

またひとつ、満たされた。

そうして、私は箱庭の中へと旅立った。

## 夢追い人の記憶（後書き）

はい……お、お久しぶりです。これ見てる人いるんでしょうか。ずいぶんと間が空いていました。月日はあっという間ですね。

これから、また記憶が紡がれていきます。

ただそこにあるだけの物語ですが。

お付き合いいただけたなら、感謝です。

## 怨殺の記憶 1 (前書き)

それではどうぞ。覗いてくださいまし。

## 怨殺の記憶 1

それはたぶん、些細な可能性の問題。  
だいたい二十人と少しの人数の世間。

目で見ても、肌で感じて、空気を読んで。

顔色を伺ってみたり、色めきたってみたり。  
好きな人嫌いな人、無意識ではじきだして。  
それはたぶん、どこにでもよくあることで。

運がよければ杞憂で終わって。

運が悪ければ憂鬱で満たされる。

そう、単純な割合の問題なのかもしれない。  
好きが多いか、嫌いが多いのか。

その絶妙なバランスは知らず知らずのうちに伝染する。  
気がついたときにはもう遅くて。周りがのっぺらぼうばかり。  
そのくせ、三日月みたいな口だけ、はつきりと浮かんでいる。  
赤い赤いその口で、彼らは笑うんだろう。

不運にも、些細な可能性に当てはまってしまった人々を。  
自らその割合を増やしてしまった道化者を。

道化役すら演じることができない、哀れなピエロの僕を。

始まりは憂鬱の色。真ん中は蒼黒の色。終わりは何で描こうか。  
杞憂には戻れないし、憂鬱はもう飽きてしまったから。

偽者の白で染めてしまおうか。道化の赤をぶちまけようか。  
それとも全部混ぜて、真っ黒にしまおうか。

僕は、終わりを望むんだろうか。

口の中に満ちるのは、錆びた味。耳から響くのは、品のない罵声。体に伝わるのは、骨が軋む痛み。これが、僕の日常で。

この蛆虫、だったか。きたない、だったか。

もしかしたら、全然違う言葉だったかもしれない。だいたいは、同じような意味をもつ罵りだけど。

そんなような、何度も何度も聞いたのしりの言葉。僕の耳には、もう雑音にしか聞こえない。

少しまえから、僕をいたぶっている複数の男子。たぶん、クラスメイトなんだろう。この場にいるからには。

まったく知らない人の顔は、思い出せないから。でも、顔をかばう腕の隙間から見る、そいつらの顔。

のつぺらぼうで。

顔なんて、どうでもいい。僕がそう望んだから。それでも怒りは忘れないために。

口元だけは、真っ赤な三日月。

誰も彼も、そういう顔をしている。

さんざん殴る蹴るをして飽きたのだろうか。

そいつらの気配が遠ざかっていくのを、感じた。そうして僕は顔を上げる。

ちぢめていた体を伸ばして、立ち上がる。

見慣れた……教室。

黒板に赤いチョークで書かれたのは、さげすみの文句。ついてもない埃を、服をはたいて落とす。

自分の席を、眺める。

机には悪戯だろう、彫られた後がある。内容は、いわずもがな。後は、花瓶が置いてある。

これも、嫌がらせだろう。

どれもこれも、よくあるようなこと。

僕の記憶にもとづいたものだから、間違っていないだろう。  
何度も何度も、こんなような扱いを受けたんだ。  
だから僕はいまも、繰り返している。  
爆発させるその瞬間まで。  
思いを、感情をためこんでおけるように。  
ぶちまけたって、爽快感はないだろう。  
むなしさがあるだけ。終わってしまった後特有の。  
飽きるくらいに繰り返して。  
そうしたら、思い切りぶちまけるんだ。  
そのための僕の世界。僕の箱庭。  
誰にも、邪魔なんてさせやしない。

何がいけなかった？

僕はもともと内気で、消極的。

だから、頑張って振舞ったんじゃないか。

明るく見えるように。少しでも、見てもらえるように。

初めてのクラス内での紹介。

精一杯の道化を演じて。

その結果があれ？

暖かく迎えて欲しいとは思わない。

ただ、嫌わないでいてくれたら、それだけでよかったのに。

輪の外にいても、眺めていられるだけでよかったのに。

どうして好奇の目で見る。どうして侮蔑の視線が刺さる？

僕が、いったい何をしたっていうんだ。

顔が不細工、気持ち悪いだった？

親から生んでもらったんだ。何をいつているんだ。

だったら整形ばかりして、別人みたいならいいのかい。

鼻を高くして、骨を削ってさ。

あたしは綺麗よ、ほら見てって……

中身は真っ黒なくせに。

僕が知っている人。そう多くはないけれど。

まだ、子供だし。それでも。

中身も綺麗な人なんて、ほとんどいなかった。

見た目どおりの中身。

でも、外見で決め付けている人から見たら、素敵なんだろうね。  
どうしてありのままではいけないのさ。

無駄に着飾らなければいけないの。嘘を纏わないと、生きてさえ  
いけないの？

うわっつらだけで、判断した気になって。

話しかけてくれたなら、よかったのに。

僕だって、笑ってこたえてあげられたのにね。

ひそひそと噂話を囁かれたら。

机に顔を伏せるしかできないよ。何の話してるの　そんな風に。

聞いたりする度胸なんか、もってないんだから。

生んだ親が嫌いなわけじゃない。

見て見ぬ振りをする教師が嫌いなわけでもない。

もちろん、世界はまばゆいから、嫌いになんてならない。

ただ。

僕はあいつらが憎い。それだけ。

耳の中に、笑い声が木霊する。女子生徒の声。

名前なんて、覚える気もない。声だけで、かろっじてわかるくらい。  
い。

彼女らは、別に嫌いじゃない。

変なもの。おかしいものを見つけて笑ってしまふのは、おかしくない。  
ない。

目の前に、逆立ちした鳥がいたら、びっくりするだろう。

その後におかしくなって、笑ってしまっただろう。

どうせ僕は道化。笑われるならいい。嘲笑われるつもりはないけれど。

でも。

弱者を強者がいたぶるのは、可笑しいだろう？

支配するでも、統率するでもこきつかうでもない。

ただ、いたぶるんだ。

骨が折れようが、血反吐を吐こうが関係がない。

ただの時間を潰すための行為。意味なんてもってないんだろう。

それが、僕は許せないんだ……きつと。

何度も繰り返して、もう飽いてきた僕の世界。

一ヶ月、一年？ それよりももっと長い？

そろそろ、色を塗り替えようか。

いっぱつでかいのを、かましてあげようか。

古びた積み木を崩して、また新しいのを積むんだ。

明日。

明日になったら、終わりにしよう。

この僕の、古びた箱庭。

## 怨殺の記憶 1 (後書き)

どうしてでしょね？

## 怨殺の記憶 2 (前書き)

それではどうぞ

## 怨殺の記憶 2

翌日。眠ったかどうか分からない。

眠りなんてものを、必要としているのかわからない。

いつもど通りの教室。

まだ誰もいない…… たぶん朝早くの教室。

僕の手の中にあるのは、一振りのバット。残念ながら、木製。

金属のほうが、使いやすそうなのだけど。

どうして僕は、木製をイメージしたのやら。よくわからない。

それでも、古典的な道具ではあるだろう。

ぶちかませば、すつきりする。

数回、軽く素振りをする。

僕は運動は、あんまり得意じゃない。でも、振り回すだけならでき  
きる。

よけられること、やりかえされること。それはまったく考えなく  
ていいんだ。

ただ、そこにあるものにぶちあてるだけでいい。

…… とっても、簡単だ。

バットが手になじんだのを確認して。

もつじき開くだろう扉を見る。

想像するのは、大きな音を立てて開かれるドア。ばらついた、無

粋な足音。

顔は？

そんなものはきまつてる。

「のっぺらぼう」

そう僕は呟いた。

すると、まるでそれが合図だったかのよう  
に、彼らが入ってくる。  
名前も忘れた、顔も忘れた たぶんクラスメイト。確  
実な、暴

力者。

椅子に座った僕を、ぐるりと取り囲んで。  
いつもとおんなじ。

にやにや笑ってる赤い口が、めだつて。僕はそれを少しだけ見て  
手近な一人の顔面へと、バットを振り下ろした。

普段使わない、ありったけの力を込めて。

最初は、鼻がひしゃげた。次にはそれがへこんで、歪んだ。

顔の骨かな。小さく、ポキポキと何か折れるような音が混じって  
いる。

目玉だつて、はじけて飛んでいった。そいつの顔は真っ赤。  
それなのにまだ三日目が笑っている。

二人、三人、四人五人。

次から次へと、僕はバットを振り下ろす。

ときおり振り回したりして。

木製だと、あんまり丈夫じゃないみたいで。僕のイメージのせい  
もあるけれど。

三人目あたりで、バットに少し罅がはいって。

四人目で、割れた。欠けた、ワインボトルみたいな形になった。

砕けた木片が、顔面に刺さって、余計にぐちゃぐちゃになる。

でも突き刺すと、抜くのが面倒だから。ただただ、振り下ろし続  
けた。

そいつらは、大人しく壊されているだけだった。

罵倒も、反撃もなにもない。ただ嘲笑っているだけ。

僕が、そう望んだから。

当たり前なことだ。

気がついたときには、取り囲んでいた全員、床に倒れていた。

僕の手は真っ赤。バットも真っ赤。床も……しとどに濡れている。

おかしいね、そんなにたいした量じゃないだろうに。

割れたスイカのように、転がるそいつら。

もう何も言わない。

はじめから何もいつていなかったかもしれない。

でも、まだ笑っているんだ。ねえ、誰が？

三日月の赤い口で笑っているのは、僕？

かわいそう、かわいそうだと思い込みたかった自分の、被害妄想。話しかけてくれた人はいた。かばってくれた人はいた？

落書きされた机を掃除してくれたのは……誰だった。

僕は誰かに、助けてと伝えた？ 殻に閉じこもって、全部見ない振りをした。

外側は開け放って。内側には、二重に鎖を巻きつかせた。

「僕は道化だ。それでいい。そのままがいい。何も考えなくて良いから」

何もないなら、ここに意味だつてないだろうに。

ピエロは、誰かを楽しませるためのもの。たまには、ちょっと怒らせたり。

あわれんでもらうための、かたちじゃないのに。

馬鹿な僕。

ふと、手の中が少し軽くなって。見ると、使いものにならないバツトが、消えていた。

それだけじゃない。骸も、どこかへいつてしまった。

残っているのは、血溜まりだけで。

そうつと、覗き込む ほら、やっぱり笑っている。

チエシヤ猫みたいな、三日月の真つ赤な口で。

まだ、戻れる。やり返しはいくらでも聞くだろう。僕は年老いてはいないのだから。

否。

望むなら、誰にだって可能性はある。

それでも、僕が望むのは……

「  
」

唇だけで、それを呟いた。

硝子が砕けたような、光景。

見慣れた教室の光景が砕け散って、はらはらと遠ざかっていく。  
瞬きの間で、僕は一人になった。最初から、最後まできつと一人。  
僕の顔を、三日月を映していた血溜まりももうない。  
今の僕はどんな顔をしているのだろう。

僕以外に何もない、まっしろな世界。

壊れてしまった、僕の箱庭。

一人きりで、僕は笑う。口の両端を、思いっきりつりあげて。  
そうして僕はまた、記憶を紡ぐ。

どんな光景だったか、何をいわれたか、どう感じたか。

嘘も真実も、全部混ぜ合わせた継ぎ接ぎで、箱庭を形作って。

僕はまた明日も、覚めない夢に逃げ続ける。

認識は、白から黒へ。

笑う色すら見えない色へと染まっていく。

これが、僕の箱庭。

## 怨殺の記憶2（後書き）

怨殺はこれにて終了。

あいかわらず、作品が迷走しております。

## 殺戮遊戯の記憶（前書き）

それではどうぞ。

## 殺戮遊戲の記憶

頭の中に鋭い音が炸裂して、気分が晴れる。

一日のストレスがすべて吹っ飛びそうなくらいに。

それと同時に覗いたスコープの先、目標がどっと倒れて塵になった。

飛び散るのは血液に似せた、赤黒い液体で。

目の前が瞬間的に赤く染まって、えもいわれぬ興奮が体を駆け巡る。

周りから聞こえる銃声に、身を震わせる。

アドレナリンがあふれんばかりで、自分の鼓動が速く聞こえた。

「やっぱり、たまらねえ」

一言つぶやいて、再び狙撃銃を肩付けで構えた。

昼夜構わず銃声が炸裂するこの場所は、マニアックな娯楽施設だ。マン・ハントがしたい人間が日々集い、時間が許す限り狩りを楽しんでいる場所。

もちろん、狩るのは本物の人間じゃない。似せてつくられたロボットだ。

人間の行動はインプットされているから、照準をポイントすると逃げ惑う。

たまに、ひざまづいて命乞いのようなポーズをとる個体もいるらしい。

肉眼でそのままみれば、ただのロボットだが。狩るときには特殊ゴーグルを身につける。

これを通すと、望む人物の姿に見えるというから、より臨場感が増す。

銃の種類もさまざま、色々な国のものが揃えられていて。俺はよくH&GのPSG-1を使っている。

フルオートもいいが、一発一発、自分の手で引き金を引くのが、たまらなく好きなんだ。

再びスコープを覗き、目標を探す。目で見てから探せばいいんだが、この方が楽しい。

拡大された視界のなかに、むかつく上司の顔と、見知らぬ男の頭を見つけた。

ときたま、射撃場から、中にはいつてしまう輩がいる。

施設の管理者いわく、本人が いいのなら構わないとのこと。

だからたいてい知らない奴が照準の先にいたら、奇矯なモノ好きだ。

もつと目の前で実際に狩りたい、そんな願望に突き動かされているのかもしれない。

このゴーグルは、人に見えるだけではなく、照準を合わせると赤い点が見える。

ただそれはロボット相手のときだけで、冒険者にはあてはまらない。

嫌いな上司の顔をポイントすると、胴体や手足にも、誰かの狙いが見えた。

横取りされたたまるか、我先にと引き金を引くと。

額の赤い色が広がる間もなく、四肢が吹っ飛んだ。

ばらばらな場所を撃たれて、ばらばらになる死体。

照準を合わせていた奴らも、さぞかしスッキリとしたことだろう。よほど木端微塵ではないかぎり、ロボットはリサイクルされ続ける。

人の欲望とおなじように、繰り返し破壊される。

ふと思いついて、見知らぬ男の頭に、狙いを定める。

こちらは完全に、勘になる。当たるも八卦、あたらずも八卦……ってな。

慣れていないやつだと、足元なんかを撃ってしまったりもするが。俺はそういうことは少ない。あくまで、だが。

ロボットを狙う時以上に、慎重に照準を合わせてから引き金を、一回だけ引く。

小気味いい音が聞こえて、頭がスコープの視界から消えた。目を離して、肉眼で見る。

横向きだったから、額にどんぴしゃりとはいかなかったが。まあ、うまく当たったから、いいとしよう。

正直な話。

ロボットを狙う時よりも、高揚感が凄まじい。

客の中には、紛れ込んだ奴だけを狙う者もいる。

俺は、たまにちよつと遊ぶだけだ。

そうして、それをまたスコープで覗き込んだ時だった。

誰か、他の奴の銃声が聞こえて。

見知らぬ男の頭が、ひしゃげて飛び散った。

ふわりとしているような、あれは……脳漿だろうか。

ロボットの中身は、疑似血液で、時間がたつと無色になる。

だが、人間の血液は、その日の営業が終わるまでは放置される。

正確には、開館前に掃除をしているという、話だが。

今、死んでなお破壊された死体も、そのまま。

いったい誰が掃除をしているのかと、考えたこともあったが……

こんな場所に働いている人間なら、なんてことはないのだろう。

物言わぬロボットや、骸を片付けるくらい。

その後も、俺は楽しみながら狩りを続けた。

そうして閉館時間。

やっている事の割には、零時ぴったしに閉められる。

たまにすっかり取り残される奴もいるらしいが。

そういう場合、翌朝の開館まで、暗闇の中にいることになる。

退屈だからといって、残骸に銃を向けるだけならいい。

一発引き金を引いたが最後、管理人に殺されるという噂がある。

その後、工場でロボットに混ぜられてしまうのだと。

だが、ただの噂だろう。学校の七不思議じゃあるまいに。

でも人は、気にはなるようで。

実際に閉じ込められた奴は、一晩じつと息をひそめていたようだ。これも、人づての噂でしかないのだけど。

わざと、隠れてみるのも面白そうだが。

痛い思いは、なるべくならしたくはない。それに意味がないとしても。

受付で借りていた銃を返し、俺は施設をあとにした。

料金？

普通になんらかの仕事をしている奴なら、問題なく払える具合だ。それを毎日、ともなると大分……モノ好きになってくるが。

俺としては、高い店で妖艶な女と遊ぶのも楽しいけれど。やっぱり。

白い柔肌も、いい声も、あの感触には代えられない。

銃声と硝煙と、飛び散る赤。

それがあれば、俺は十分だ。

モノ好きな俺は、明日も通うのだろう。

どうせ昼間のうちに、ストレスが限界を超えるのは目に見えてい

る。

何でああも、がみがみとうるさいのか。

職場でも、一発お見舞いしてやりたいくらいだ。

それをしたら、捕まるか……追われるかするだろうが。

撃退しつつ逃げ延びる、というのも興奮しそうだ。

だって、ゲームみたいだろ？

リアルなんかより、全然いい。

あくる日の夜。俺はひたすら狩りをしていた。

今日はラッキーなこともあって。

この施設の利用者には、女も多い。結構、美人がいてな。そいつとゲームをした。

時間を決めて、その中でどちらが多く狩れるか。

客同士でよくやる、他愛のないゲームだ。

結果としては、俺が勝った。

彼女は、早撃ちが得意だったが、ぎりぎりで勝てた。

やはりやるからには、見栄ってもんがあるだろう。

賭けるものなどなくても、それだけで楽しめる。

すっかりテンションのあがった俺は。

久しぶりに、中に入ってみようかと思った。

間近で狙い打つ興奮も、たまらない。

美女とのゲームでアドレナリンはマックス。

今なら、撃たれたってたいした痛みには感じない。

スコップの倍率を調整して、俺は中へと入った。

自分が狙われているかどうかはいっさい気にせずに。

ちらと二階の場を見ると、さきほど遊んだ女がいた。

また、いいところを見せてやるか。

適当な獲物を探して、狙いを定める。

あまり至近距離だと狙いづらいが……まあいいか。

高揚のあまり震えそうになる指を制御して

引き金を、引いた。

銃声は聞きなれたいつもの音。

目の前に、赤い色彩が広がる。

遠くの時よりも、長く鮮やかに。

自分の鼓動が、どくどくと聞こえる。今この瞬間。

俺の中にも、血液が駆け巡っている。ぶるりと沸き立つ。

アドレナリンは、限界突破。

「やっぱり……たまんねえよな」

一言呟いてから。ふと女のことを思い出して。

銃を構えている女に向って、親指を立てた。

照準を合わせてはいるけれど、見えているだろう。  
いいところも見せた。

また再び獲物を探そうと、スコープを覗き込んで……  
頭に、微かな衝撃を感じた。

次にむくりと起き上ったのは、自分の部屋。

俺はいつたい、何をしていたんだっけな。

ぼんやりと考えてから、思い出す。

ああ。今回はあの女にしてやられたんだった。

次は鉛をプレゼントしてやらないとな。

近距離で、散弾銃でもかましてやろうか。さぞかしスッキリする  
だろう。

窓の外から差し込む光が、まぶしい。今は昼間か。

時計を見るものの、遅刻は確実。

ならいいさと開き直って、ゆつくりと部屋をでていく。

上司の顔はもう十分だ。仕事なんかいなくても問題はない。

しばらくはあの女でいけるだろう……

夜の時間を楽しみに、待ちわびながら。

俺はひとつ、舌なめずりをした。

さあ、また狩りを楽しもうか。



## 殺戮遊戯の記憶（後書き）

はい、今回ののはひとつで終わりです。

狩りが好きそうな人はいそうですね……

ただそこに在るだけの話ですが、今後ともよろしくお願いいたします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1545e/>

---

箱庭の記憶

2011年5月27日08時55分発行